

森鷗外「緑葉歎」論

——緑葉の歎き——

——英文題目 A Study on Ryokuyoutan (Ogai Mori) —— A grief of green leaves ——

松 木 博

序 章

「緑葉歎」は、明治二十二年二月二十二日の「読売新聞」附録欄に、鷗外漁史・三木竹二同訳として掲載された。一月から同欄に連載されていた戯曲「音調高洋筆一曲」と同様に、弟篤次郎との共同作業の形をとってはいるが、森鷗外がドイツから帰国後初めて発表した翻訳小説であり、従来より鷗外の文業として扱われている。

この作品についての研究は、私見によればこれまで二つの方向から行なわれて来ている。一つは、原作者であるフランスの作家A・ドーデと翻訳者鷗外との関係を中心に、比較文学的手法で森鷗外の翻訳の質を検討しているものである。小谷幸雄氏の「鷗外とドーデ——資料的エスキス——」や富田仁氏の一連の研究⁽¹⁾⁽²⁾などがそれである。他の一つは、前者を参考にしながら、鷗外の生活史や創作とも関連させて論じるもので、重松泰雄氏の「翻訳『緑葉の歎』について」⁽³⁾はその優れた達成と言える。

これらの研究が開示してくれるものは大きい。しかしその一方で、翻訳小説とはいいいながら、流麗な日本語表現として明治二十年代の読者に提示されたこの作品を、十全に読むことが行なわれているとは言

い難いようにも思う。それはわかりやすく言えば次のようなことである。おそらく現在この「緑葉歎」を読む際には、ドーデの作品として、その経歴や代表作を想起しつつ読み進めることになる。しかし、この作品はドーデの小説で初めて邦訳されたのであり、当時の読者にはドーデは未知の作家であった。鷗外の作として読まれた筈である。

やや奇矯な言い方かも知れないが、著作権の概念が未発達だった当時、翻訳者は自己表現としての意味を翻訳作品に込め、その一方で読者は同時代の作品としての興味をその翻訳に抱いていた⁽⁴⁾。言ってみれば、D・デフォーもゲーテもプーシキンも同時代人として享受されていたのだ。「緑葉歎」は掌篇と言ってもいい小さな作品であるが、その作品が当時に包んでいた表現としての衝撃力を探求する、そのような意図をもって本稿を始めてみたい⁽⁵⁾。

第一章

まずここで「緑葉歎」がどのような内容の作品であるか、簡単に紹介しておきたい。

アルジェリア生まれの青年カドユウルは、普仏戦争にアフリカ猟兵

連隊の軍曹として従軍し、アルザス地方の戦場で重傷を負う。幸運にもプロシヤ軍の捕虜にならずに、現地の農家に担ぎこまれ、そこで療養することが出来た。その家にはケエテという美しい娘がいて、カドユウルを献身的に看護してくれた。そうしたいわりを嬉しく思うカドユウルと、彼が自分達の敵プロシヤと勇敢に戦ってくれることを知るケエテとは、やがて恋する仲となった。国や肌の色を越えた愛である。

けれども、傷の癒えたカドユウルはアルジェリアに帰っていった。故郷に戻ってからもしばらくはケエテのことを忘れずにいたが、程無くこの英雄は隣村の村長の娘と婚礼をすることになる。

婚礼の贈り物を買に行った帰り、自分の村に移住して来たヨーロッパ人の群れの中にケエテを見付けたカドユウルは激しく動揺し、かつての感情が蘇ってケエテとの駆け落ちまで考える。しかし、ケエテは既に結婚しており、夫婦で移住して来たのだった。

重松泰雄氏は前記の論文で、この作品の「外地淹流者の異邦女性に對する遂げられぬ恋の物語だという点」に注目し、そこから「舞姫」「うたかたの記」、さらには鷗外の実生活上の結婚との関連を考察している。「緑葉歎」の位置づけとしてはまことに画期的な見解であり、異論の余地はないように思われる。

けれども、「緑葉歎」における恋愛のどのような個所に着目するかについて、私の見解はやや異なっている。そこで、重松氏の論と対照しながら私見を述べてゆきたいと思う。さて、重松氏は主題をめぐって次の様に論じている。

やや子細に見れば明らかなように、「緑葉の歎」は主題の面では他の翻訳以上に「舞姫」との大きな類似点を持っている。それは主人公の異邦女性に対する思慕が彼の別離後にまでわたるということである。「緑葉の歎」のカドユウルはケエテの面影を帰国後も忘れ去ることができない。そのため彼は日々悶々として心楽し

まぬのである。そのような主人公の恋情は、発狂した愛人の「生ける屍」を後に帰国の途にある「舞姫」の主人公の痛恨の情とは、むしろ等質のものと言えぬだろう。しかし、ともに淹流の地での愛を結実させることができず、別離後も女の面影を思慕し続けるこの二人の主人公の姿には、たしかに浅からぬ類縁関係が認められてならぬのである。ただしわたしは、そこに一方から他方への影響の跡を読もうとするわけではない。むしろ注目したいのは、双方を支える原衝動の問題である。おそらくこの二つの作品、この二人の主人公を生ましめた原衝動——もしくは、そのような衝動の根となった体験——は、同一のものであるに違いないとわたしは確信する。それは何か。すでに明白だと思うが、留学時から帰朝時にかけての、鷗外自身のあの著名な恋愛体験（敢えてわたしは恋愛体験と言うが）を措いてほかにあるまい。

やや長い引用となったが、重松氏はこのように「緑葉歎」と「舞姫」を作家自身の体験を媒介に密接に関連づけて論じている。

しかし、「緑葉歎」におけるカドユウルとケエテの恋愛には、重松氏が指摘する別離後の思慕だけでなく、以下のような注目すべき点がある。まず、鷗外が用いた翻訳原本から見てみよう。

Käthe wußte gar nicht, wie das möglich sei, aber bedenklieh blieb der Punkt immerhin. Es schien an dem, was sie gehört hatte, auch etwas Wahres zu sein, denn mehr als einmal hatte schon Kadur, wenn er sie ein wenig necken wollte, gesagt: "Kadur bald heiraten! Er nehmen vier Frauen! Vier!" Käthe war dann jedesmal in Zorn geraten: "Oh, dieser abscheuliche Kadur! Dieser Heide!" Dann begann wohl der Türke zu lachen—herzlich und lustig wie ein kind; plötzlich aber würde er wieder ernst.

（ケエテはその時まで、どのようにしてそのこと——「夫多妻」が可能なのか、すこしもわからなかった。そしてあの立派なカドユウルで

さえも、その制度を必要としているのかどうか、本当のところわからなかったけれども、カドユウルはケエテをちょっとからかっていた時に、こんなことを歌うように言った。「カドユウルはまもなく結婚するんだよ！ 彼は四人もの女性と結婚するんだ、四人とだよ！」ケエテはとても怒ってしまっただけだ。「ああ、なんと忌むらしいカドユウルだろう！ この異教徒め！」その時、この回教徒カドユウルは子供のようになつて心から笑うように笑っていたが、突然にあらたまって真剣な様子になつた。

（傍線部引用者）二人の感情が臨界点に達して、やがて恋が芽生える場面であるが、その引き金となつたのは意外にも、カドユウルが戯れに言つた自分は四人妻を持つつもりだという宣言だつた。一夫一婦制が当然のヨーロッパ圏に住むケエテにとつて、それは衝撃であつたのだが、その衝撃がケエテの意識の深層にあつたカドユウルへの愛情を一気に顕在化させ、それに応える形でカドユウルもケエテへの愛情を認識したのである。この事件をごく平板にカルチャーショックと呼ぶかどうかはともかくとして、傍線部に明らかな様に翻訳に用いられた原文にこの作品では初めてエクスクラメーションマークが付けられており、物語の核心に入つて行くための二人の感情の高まりが暗示されているのである。ここでさらに鵜外の訳文も検討してみよう。

或る日カドユウルはケエテをからかつて居る折りに、「私は国へ帰れば、女房を四人持つ積りだ、四人だよ、」と云ふと、ケエテは「嫌なカドユウルさんだ、」と気色を変へて怒つた。カドユウルは其顔を見て、吹き出して笑つたが、ふと何か思ひ出した様に真面目になつた。そしてケエテの顔を大きな目を開いて見詰めた。その見方が何んだか人と別れる時に顔を覚えて置かうと思つて見る様であつた。是がカドユウルとケエテとの恋の始であつた。

簡潔だが、しかしその情景を的確に読者に伝達している。若い男女には極めて自然な出来事である恋愛の成立だが、ここで注意すべきなのは、この二人に限っては、「人に別れる時に顔を覚えて置かうと思つ

て見る様」な、つまり予め断念された時点から出発する恋愛であつたことだ。

無論、どのような苛酷な逆境をも克服して行く恋愛は存在するし、それが本来の姿であるだろう。けれども、始発の時点で断念されていた時、しかもそれが生活の基盤である文化的差異が原因である時には、その恋愛体験はやはり空虚な様相を帯びて来ることになる。

ここで前もって言つてしまふならば、「緑葉歎」が秘匿していたテーマとは、予め断念された恋（結婚）の悲劇である。出会つた二人には、既に別れることが予定されていた。その点こそ重要なのだ。この「緑葉歎」のテーマが、やがて創作（ドイツ三部作）に於いて変奏されたことはもはや贅言を要すまい。ただここでは、重松氏も言及していた鵜外自身の恋愛体験の行方について、若干の考察を加えておきたいと思う。

鵜外が当時陸軍の武官であつた以上、いわゆる「陸軍武官結婚条例」に従う事は極めて当然のことだつた。新妻佳珠子氏はその論文「森鵜外の『結婚願』について」のなかで次のようにまとめている。

日本陸軍の官費留学生である森鵜外が、これらの条例や前例に無知であつたとは考えられない。従つて、将来的に結婚の可能性を内蔵するような外国女性との交際を、鵜外が持つということなど到底想像することも出来ない。いいかえれば、手続きの煩雑なばかりか、未来への有利な展望がまったく無い国際結婚の不利を、鵜外は知悉しており、あえて抗う意向など、毛頭持たなかつた、としてもあながち的はずれではないだろう。

かなり断定的な見解であり、反論は困難と思われる。が、若しも言わゆる国際結婚に対して、家族の支援があるとしたらどうであろう。言うまでもなく、その仮定に対しては小金井喜美子の「次ぎの兄」にうかがわれる、両親をはじめとする絶対的反対という否定的な記述があるのだが、この「緑葉歎」を共訳した篤次郎はどう対応したのである。兄の恋愛（結婚）に対する彼の意識も確認しておきたい。

森篤次郎には直接的に兄鷗外の結婚について述べた文章はない。ただ、ドイツ滞在中の鷗外に宛てたおびただしい書簡の中に、その片鱗を窺うことができる。二三挙げてみよう。

○マ……アキレタ……ドレモドレモ好き者ダナ……イヅコノ浦モ……オット都モ……ソレデモ旧イ……

○ウウ独乙学校教師ノ……川上ノ妹ダ助平ダナ……タシカ医生ト一所ニアイツノ自費デ……散々慰レテ……イヅレ清姫ニ……来因川デ……大蛇ニ……オ、コワ⁽¹⁾

明治二十年十二月、大学の試験を直前に控えた篤次郎が、ベルリンにいる兄鷗外の意識の流れを表現しようとした断章と推定される。というのは、この断章の冒頭に「十月十九日於伯林森林太郎記」と書かれているからである。鷗外が赤十字同盟の会議で演説し、高い評価を受けたのは九月のことだった。大役を勤めて、一種の安堵感に浸りながら残り少ない留学生生活を思う。そうした時期の兄の心の中に潜む妄想を言い当てようとした、知的ゲームの色彩を帯びた書簡なのだ。

残念ながら鷗外が家族に宛てた書簡は公開されていないので、この篤次郎の断章がどのような事実を背景としているか不明である。しかしどうやら、当時の留学生達の行状を暗示しているようだ。前者が同胞の集まりでの手柄話（どこか「文つかひ」を連想させる）に接しての感想、後者は話題になっている女性（愛する留学生を追いかけてドイツまでやって来た）に遭遇して、その末路をも想像したものと考えられる。ライン川を大蛇（清姫すなわち恋に狂ったその女性）が泳ぐなど面白い。しかしそうした面白さばかりでなく、意味をなさないようでありながら、ドイツ滞在が四年を越えた鷗外の心に胚胎するであろう煩惱や妄想を描きだしているとはいえないだろうか。そこに、留学中の鷗外に対して家族が与えた禁忌を読み取ることは不可能だろうか。

やがて、鷗外の不在の間に妹喜美子は小金井良精に嫁ぐ。次の文章は、明治二十一年五月、帰国直前の鷗外に小金井夫妻の近況を報告し

た篤次郎書簡の一部である。

○一日ハ新橋ヨリ汽車ニテ大森ニ遊ビ八景園ニテタ飯ナシ諸処散歩シテ帰途ハ銀座通ヲ互ニ西洋風ニ手ヲ組テ歩ミシカバ車夫ナドガ指シテ「アラ見ネヘ女唐ガ通ラル（西洋婦人ノ符謀）ト云フニハ低口セリト⁽¹⁾

まだ日本には、男女が手を組んで歩くことが出来る場所は存在していなかった。この記述にも、国際結婚の前途を暗示するものがある。おそらくドイツを離れる直前、この書簡を手にした鷗外は、帰国しようとする故国の状況に、ある種の寂しさを禁じ得なかっただろう。鷗外流に言えば、「普請中」の国へ帰って行こうとしていたのだから。

要するに、鷗外のドイツに於ける恋愛は、単に「陸軍武官結婚条例」によって封じられているのではなく、家族のあるいは風土的に幾重にも封じられていた。ただし、そうした予め断念された状況の下に於いても、生まれる恋愛があるのではないだろうか。あたかも「緑葉歎」のカデュウルとケエテの間の恋愛の様に。

篤次郎と共に「緑葉歎」を発表した時、鷗外が秘かに企図していたのは、自らをカデュウルに擬しての自己処罰（女を捨てた男が未練に悩まされること）、そして別離し（捨てられ）た女性（ケエテ）が伴侶を得る結末による自己救済すなわち罪の意識からの解放の両方だったように思われる。たしかに、「緑葉歎」は悲痛な激しさを持ったドラマではない。しかし、優柔不断な男のペーソスのみを盛った単なる小品に留まるものではないことも、また明らかであろう。

第二章

「緑葉歎」においても一つ不可解なのは、その題名の由来である。もっとも、鷗外の翻訳小説の題名が全て翻訳原本に忠実というわけではなく、例えば W. Irving の Rip van Winkle の翻訳題が「新浦島」とされていることなど、適宜なされているのだが、「緑葉歎」

になると題名の意図するところさえ判然とはしていない。序章で言及した先行研究も、題名に考察を加えたものは残念ながら無い。そこで、本章では「緑葉歎」なる題名の背景を探索することにした。その際参考とするのは、同様な翻訳小説および翻訳詩の題名であるが、鵬外のすべての訳業を対象になるとかえって散漫になるので、明治二十五年七月刊行の作品集「水沫集」に収録された初期の翻訳作品を分析することとする。

さて、題名のパターンによって作品を分類してみると、以下の様になる。

A 翻訳原本の題名に忠実な作品

例としては「ふた夜」Zwei Nächte や「洪水」Die Sturmflut などがある。

B 作品の内容に即した和風の題名が付されている作品

例えば、Lesing の Emilia Galotti が、陵辱されるヒロインを象徴する「折薔薇」とされるようなもの。前記「新浦島」もそれに該当する。

C 原題が説明不足であるところを補って命名されている作品

Körner の Toni がヒロインの名だけであることから、「伝奇トニー」としたような作品

以上のような題名のパターンがこの時期の翻訳小説に見られるが、「緑葉歎」はそのいずれのパターンにも適合しないように思われる。そこで、この作品の主題を解析しつつ、その意味を検討していくことにしたい。

既に前章で分析したように、「緑葉歎」は断念から始まる恋愛、そしてその恋愛に対する悔恨の物語であった。カドユウルはケエテを残して去りながら、未練に苦しめられる。

このような主題を考察して行くと、時期的には離れているが次の様な作品に到達する。少し長くなるが引用してみよう。

リースヘン

あなたバルバラさんの事を聞いて。

グレエトヘン

知らなくつてよ。人の出る所へ行かないのですもの。

リースヘン

本当なの。ジビレルさんがけふさう云つてよ。とうとう騙されちゃったのだつてねえ。上品振つた挙句だわ。

グレエトヘン

どうしたと云ふの。

リースヘン

評判だわ。

飲食するにも二人養ふやうになつたのだとさ。

グレエトヘン

まあ。

リースヘン

好い気味だわ。

随分長くあの男に食つ附いていたわねえ。

やれ散歩に連れて行く、

そりや村の踊場へ連れて行くと云ふ風で、

どこでも一番の女だと見せ附けて、

葡萄酒やパテを御馳走してねえ。

だもんだから自惚れて好い女の気になつていたわ。

男に物なんか貰ふのを

恥かしいと思はない程、根性が腐つていたのだわ。

なめついたりすひついたりしてさ。

いつの間にか生娘ではなくなつていたのね。

グレエトヘン

可哀さうねえ。

リースヘン

あなたなんかさう思つて。

わたしなんか糸とりが忙しくつて、

おつ母さんが夜外へ出さないのに、

好い人の所へ降りて行つて、立話をしていたのね。

暗い廊下に立つたり、戸口のベンチに

掛けたりして、時がたつても平気だつたわ。

その代今へこたれて、罪の褌袴を着て、

お寺へ行つてあやまるが好いわ。

グレエトヘン

でもきつとあの人がお上さんに持つてせう。

リースヘン

そんな事をすれば馬鹿よ。気の利いた男だもの。余所でも樂に遊べるわ。

もう行つてしまつたつて。

グレエトヘン

まあ、ひどい事ね。

リースヘン

若しお上さんになつたら、ひどい目に逢ふわ。

若い衆達は髪の青葉を引つ手繰るし、

わたし達は門口へ切葉を蒔いて遣るわ。

(傍線引用者)

いうまでもなく、ゲーテの「ファウスト」の一節である。ここでは鵬外訳を引いてみた。

「ファウスト」全編のヒロインたるグレエトヘンが、井戸の辺りで友人である少女が純潔を失つたこと、さらに妊娠したことを聞く。そうした過ちを犯した女性はタブー視され、純潔の象徴としての青葉の冠を頭に載せることをゆるされない。青年達によって、彼女の冠の青葉はむしり取られてしまうのだ。こうした風習の起源は古く、ヨーロッパ全土に広く存在していたらしい。波線の部分の様な厳しい差別と、最後の傍線の様な集団による迫害とが、哀れな女性に加えられる

のである。

「ファウスト」はある意味でグレエトヘンの転落のドラマであるが、この場面でグレエトヘンが聞く友人の悲劇は、彼女自身のカタストロフの前兆と言ふべきだろう。やがてグレエトヘンの冠の青葉も泥にまみれることになる。それはさておき、この「青葉の冠」が持つイメージは、「緑葉歎」の中に既に含まれていたのではないだろうか。つまり、「緑葉」とは「ファウスト」に於ける「青葉」の意味を担わされていたと考えられないだろうか。無論ここには、同一のイメージをなぜ「緑葉」「青葉」と二様に表現したか、という疑問が残る。

それに対して、わたしは次のように考えている。明治二十二年当時の鵬外は、「青葉」という言葉にまつわる日本的なものを避けようとしたのではなかったか。すなわち、「青葉の笛」の故事や「青葉城」など、「青葉」には旧来のイメージがあり、題名に使った場合は読者に誤った予断を与えかねない。そこに、*grüner* が敢えて目新しい「緑葉」と翻訳された理由があるように思う。言わば「緑葉」とは、さきに述べたような「ファウスト」的なイメージを盛るための新しい器だったのである。

ここまで考えてくれば、鵬外によって「緑葉歎」と命名されたカドユウルとケーテの物語は、原作者A・ドーデの意図を陵駕して、「ファウスト」の中のファウストとグレエトヘンの悲劇に密やかに重ね合わされていたことが想像出来る。

さて、「緑葉歎」の初出型では、カドユウルとケーテの恋の推移は次のように書かれていた。第一章の引用部の後半に接続する形で引用してみる。

是れがカドユールとケーテの恋の始であつた

○

カドユールは病気が痊^{なほ}つたから国へ帰つた此事が聞こえるとマトマタ種の総代からカドユールを迎へる為に笛太鼓を鳴らして村の入口まで出た

ここに見られるように、○印をはさんでストーリーはかなり飛躍してしまふ。二人の恋の展開、別れの場面は見事なまでに省略されている。つまり、ケエテが純潔を失い、取り残されて周囲の非難を浴びる悲劇、「緑葉」事件は語られることがない。とすれば、ここまで進めて来た題名の考察は単なる深読みとうけとられかねない。

しかしながら、この時期の作品を広く読むならば、そうした描写はほとんどなされていない事が了解できるであろう。引用の後にある、「星は思ひ、夜は夢に見たケエテの姿」という表現、再会して「真蒼に成った」カドユウルの表情などから、当時の読者は二人のただならぬ仲を十分に読み取り得た筈である。ケエテはやはり、「緑葉」事件を経過して、その後を得た伴侶とともに、再生した姿でアルジェリアに現われるのだ。ただ、なんといっても、長さが違うので、カドユウルの悩みは性急に過ぎるし、ケエテの内面は読者には明らかにされない。「緑葉」という題名の意図も、当時の読者にはほとんど理解されなかったと考えられる。

けれども、この小品の中に鷗外が封じ込めようとした衝撃力は、森鷗外の翻訳活動の第一歩にふさわしいように思われる。

注(1) 昭和三十二年十二月「比較文学研究」に掲載。

(2) 昭和四十七年七月「鷗外」に発表された「鷗外とドーデ——『戦僧』『盲帝の曲』をめぐって」および昭和四十九年十月『欧米作家と日本近代文学』所収の「アルフォンス・ドーデ」

(3) 昭和五十九年十月「文学」に掲載。

(4) 翻訳者の文学的地位は、現在と比較にならない程高かったと考えられる。森田思軒等の活躍がそれであり、内田魯庵の『鳥留好語』(明治二十六年)の識語等にも、翻訳者の意気軒昂ぶりがうかがえる。

(5) 今回論じる「緑葉歎」は、初出時の題名は「緑葉の歎」であるが、流布された形を取るという理由で、『水沫集』以降使用された題名を使うこととする。尚、p78の登場人物名の異同も、そこに起因する。

(6) 東大図書館所蔵の原本の借覧を受けた。ここに記して感謝したい。

尚、鷗外以外の訳文が現在に至るまで存在していない為拙訳を付した。御叱正を仰ぎたい。

(7) 『水沫集』所収の本文による。

(8) 「文つかひ」に於けるイ、ダ姫の「塚穴」発言や、「うたかたの記」に於ける巨勢のマリエへの態度など。

(9) 昭和六十三年九月「目白近代文学」に掲載。

(10)(11) 日本近代文学館刊行「日本からの手紙 滞独森鷗外宛書簡」No 96及びNo 118

(12) 大正二年訳。表記は岩波版三十八巻本全集による。

(13) 語られなかった「緑葉」事件の例として、リットン原作・織田純一郎訳「花柳春話」第二十七章及び第二十八章(明治十一年)に於けるアリスの突然の出産の場面を挙げることもできよう。

付記 尚、本稿は昭和六十三年十一月五日、森鷗外研究会例会に於いての口頭発表を大幅に改稿したものである。当日多くの示唆を下された出席者各位に深く感謝する。